

書籍紹介



水村美苗 著
筑摩書房 2015.4.10 第1刷発行

『増補 日本語が亡びるとき 英語の世紀の中で』

〔英訳の題:
The Fall of Language in the
Age of English〕

〈国語〉とは、もとは〈現地語〉でしかなかった言葉が、〈普遍語〉からの翻訳を通じて、〈普遍語〉と同じレベルで、美的にだけでなく、知的にも、倫理的にも最高のものを目指す重荷を負うようになった言葉である(188)。そして、〈現地語〉が〈書き言葉〉をもつようになるのは、〈普遍語〉を翻訳するという行為を通じてのことである(203)。日本語は、明治維新前までは主に漢文から、維新後は主に西洋語からの翻訳を通して豊かになってきた。日本における〈大学〉も主に翻訳機関として機能した(266)。また、日本人が「日本語を大切にしよう」などと思わずとも、日本列島の地理的条件が、長い長いあいだ、日本語を護ってくれていた(388)が、今世紀に入って急速に普及したインターネットの出現—しかも英語が〈普遍語〉となったのと時を一にしたインターネットの出現は、今まで日本語という〈書き言葉〉を護ってきた地理的条件を、徹底的に無意味なものにしてしまった(392)。ここでの〈普遍語〉は、従来の局所的な普遍語と異なり、世界全域で流通する言葉である。グローバル化の時代、全世界の人々が共通語として使う一つの〈普遍語〉が台頭するのは必然であったが、その〈普遍語〉が英語であるのは、本質的に普遍的な言葉だったからでなく、歴史の偶然にすぎない。英語は、偶然によって〈普遍語〉となった言葉(=accidental universal language)なのである。ただ、ここまで広く流通すると、通じるがゆえに、多くの人が使い、多くの人が使うゆえに、より通じるから、さらに広く流通してゆく(65・453)。

英語が〈普遍語〉になるとは、英語圏をのぞいたすべての言語圏において、〈母語〉と英語という二つの言葉を使う人—二重言語者(比喩的な表現で、母語と英語の両方の図書館に出入り可能な者)—が増えていくことを意味する(67)。二重言語者はまた、母語と英語の非対称性—〈真実〉が一つではないということ—を常に意識させられる(113)。

ここで、本書でいう「言葉が亡びる」とは、言語学者がいう、その言葉の最後の話者(より精確には最後の聞き手)が消えてしまうことではなく、その言葉の〈書き言葉〉が廃れてしまうことを指す(68)。

ところで、学問とは、なるべく多くの人に向かって、自分が書いた言葉が果たして〈読まれるべき言葉〉であるかを問い、そうすることによって、人類の叡智を蓄積していくものであり、学問とは〈読まれるべき言葉〉の連鎖にほかならず、その本質において〈普遍語〉でなされる必然がある(183)のだから、いっそのこと自然科学—そして数学や工学—のようなものは、最初から英語で学んだほうがいいのだろうか。だが、そのようなやりかたは、決して良い解決法にはならない。日本人が子供のころから自然科学に興味をもつのは、西洋語からの科学の概念が、それが翻訳であることを意識されないまで日本語に浸透し、ふだん使っている言葉でもって自然科学を学べるからである(416-417)。

そして、日本語はどここの言語グループにも属さない。え、人口減少に伴い、母語集団も減ってゆく言葉である。しかも、日本という一つの国でしか使われていない。日本語を護らねばならないという合意に達するのは、日本人にしかできないことなのである(444)。

〔以上において丸括弧内の数字は関連するページ。〕

著者は問題提起とともに解決策も提示しています(七章 英語教育と日本語教育)。具体的な提案内容については本書で御確認ください。

紹介者 審査第二部福祉機器 鈴木 洋昭